

川沿いの日常

御船川は交通の大動脈

先人たちに酒造りの文化をもたらし、交通の要としても御船の発展を支えた御船川。この川沿いには、人と人が行き交う幾多のドラマが繰り返されてきた場所でもある。この母なる川なくして、昔も今もこの町を語ることはできない――



↑昭和30年代まで御船川沿いに並んでいた五尺桶の日常風景（松永忠勝さん提供）

五尺桶の名物話し

酒蔵と共に「酒造りの町」に花を添えたのは、御船川沿いに整然と並んでいた五尺桶の光景だった。蔵男たちが、人の背丈ほどもある五尺桶洗いに精をだす姿がよく見られていた。

昔の酒は「木香」はなくてはならぬ香りとされ、酒に木の香りをつけるため苦労した時代だった。そのため酒桶には、良質の阿蘇大矢野原産の杉材が主に使われた。この杉材をもってして、御船の良い酒が生まれたともいわれる。

明治の職業で、御船には桶屋が多く、ほとんどが酒造元の専属だった。五尺桶はその職人たちの手で造られた。その御船名物の五尺桶にまつわる話も残っている。

大正元年7月、御船川が氾らんして、今にも交通路の五庵橋が流されそうになった。商店街や消防団は流失阻止にやっきになった。そこで考えたのが五尺桶だった。そのころ五庵橋の近くには、角雑穀屋、板屋、恵美須屋、高瀬屋といった大きな造り酒屋があり、五尺桶を5、6本借りて橋の上に置いた。五尺桶に水をいっぱい入れ、橋が流れないよう重しとした。残念ながら、五尺桶も橋とともに流れ去ってしまったという。

また昭和5年の冬、下荒瀬の寿座という芝居小屋から火の手があがった。いち早く消防団がかけつけて消火にあたったが、肝心の水が足りない。御船川からは遠くて、消火ホースがとどかない。そのとき、消防組頭（消防団長）が機転を利かせ、近くの

恵美須屋から五尺桶を数個借用。御船川の水を引き入れながら、中継ぎして火を消しとめたという。「酒造りの町」に言い伝えられる、御船ならではの話である。

運輸交通の舟着場

江戸から大正の終わりごろまで、御船川を往き来する川舟は重要な交通機関だった。御船で造られた酒、七滝や矢部（現山都町）などの山間から集められた米や木炭、木材などを積んだ川舟が川尻（熊本市）めがけてこぎ下った。川尻からの帰りには、日用雑貨や海産物を持ち帰っていた。一日に10隻多い日には20隻が上り下りしている様は活気があり、町の風物詩の一つでもあった。

五庵橋近くで元田中酒屋を95年営んだ
田中 與四郎さん（滝川・77歳）

昔は、五庵橋付近に6畳ほどの舟着場へ下りる石段がありました。すでに舟便はありませんでしたが。河川改修前の御船川は今よりも幅が狭く、五庵橋も今の半分くらいでした。当時の五庵橋は木橋で、水害でよく流されました。御船川は水害も多かったですが、兩岸の町並みや（酒造の）歴史をつくりました。それから当時、小学中学生の写生は、川岸から白壁の蔵を描いていたものです。



↑昭和40年代、御船川沿い河川敷でみかけられた少林寺拳法の稽古にいそむ光景



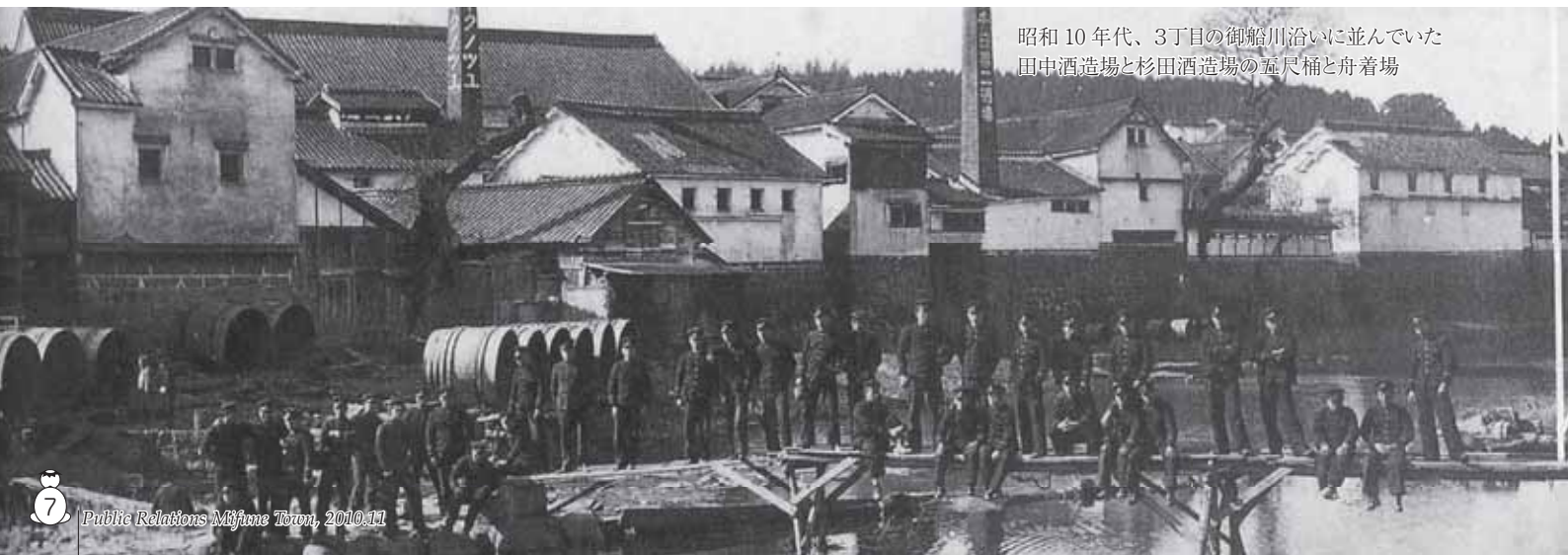
↑昭和56年、新橋左岸の河川改修工事。杉田呉服屋が所有した最後の舟着場も姿を消した

川舟を御船の子どもは「川尻舟」と呼んでいた。長さ7メートル、重さ2トで、米俵を30俵積めるのが精いっぱいだった。川尻舟は朝10時ごろ御船に着き、夕方3時ごろには川尻へと下っていった。御船は発着場として大いににぎわった。荷を積みおろすところを「舟着場」と呼んだ。御船川の舟着場は五庵橋の東岸にあり、公共用で舟賃さえ払えば自由に人も乗れ、荷も運んでくれた。大きな商家ともなると家業の荷を積みおろすため、個人で舟着場をもっていた。そのため御船川沿いには、1丁目の「めがね橋」から牛ヶ瀬まで、20数か所の舟着場が点々とあった。現代の車社会で道が渋滞するように、当時は舟の渋滞で御船川は混雑した。

大正、昭和になって登場した人力車や客馬車、御船鉄道の登場によって、御船川の舟運は次第に衰退の一途をたどった。そして舟着場も昭和47、49年の御船川水害の災害復旧工事、昭和50年代の河川改修ですべて取り壊されていった。

御船川は、古くから運輸交通の大動脈として町の発展の礎となった。しかし、「舟着場」ともに時代の流れにその役目を終えたのだった。

昭和10年代、3丁目の御船川沿いに並んでいた田中酒造場と杉田酒造場の五尺桶と舟着場



酒造りの仕込みや貯蔵に使われていた五尺桶。直径約150センチ、高さ約180センチ